

「いのちの大切さ」を考える

大町公*

拙論は、兵庫県立教育研修所での平成十年年度第一回「小・中・高等学校 生と死を考える教育（研究）講座」の講師の依頼を受け、六月十二日約三十名の先生方を前にして行なった講義内容である。手を加えたところもあるが、ほぼ当日のままである。

拙論を、去る七月六日急逝されました柳川光章先生の御霊に捧げます。

はじめに

ただ今御紹介いただきました奈良大学の大町です。ちょうど十年前に、ある学会で上智大学のアルフォンス・デーケン先生のお話を聞きまして、デス・エデュケーション、「死への準備教育」という言葉を初めて耳にしました。そういうものがあるということに強い衝撃を受けました。

と言いますのは、私は幼い頃から死に強い恐怖感がありました。京都大学文学部に入りまして、哲学科を選びました大きな理由は、この死の恐怖をなんとか克服したいということでした。一九六七年に入学しました私の在学中は、学生運動の最も激しい時代で、その中で私の

関心もやずれていったのですが、死の問題は絶えず心の中にありました。大学院の後半、研究対象にバスカルを選んだのも、今から思えばそういうことからだったように思います。

大学院を出まして、非常勤講師としてあちこちの大学で教えていた時も、死の問題を取り上げるといことはしませんでした。そういう発想自体がなかったと言えます。

ですから、デーケン先生の話をお聞きしまして、大勢の学生を前に、死をメイン・テーマとして話ができるということが驚きでした。それからは死に関する本を読みました。まもなくデーケン先生が会長をなさっている「生と死を考える会」に入会もしました。当時、死についての本はぼちぼち始めておりましたが、「死への準備教育」となるとデーケン先生のものが中心でした。私も三年くらいして勤め先の奈良大学で「死への準備教育」を始めてみました。昨日講義なさいました高木先生（英知大学教授、カトリックのシスター）は、「兵庫・生と死を考える会」の会長をなさっていますが、昨年大阪でも「生と死を考える会」が誕生しました。私は奈良に住んでおりますが、お誘いを受けまして会員になり、運営委員を務めております。私は現在特定

の宗教を信仰してはおりませんが、そういう関係から、高木先生のお話と似通ったところがあるかもしれません。

「死への準備教育」の必要性は、今後ますます高まるだろうと思います。そう思うのですが、こういうテーマで研究している大学教員は決して多くありません。ほとんどいないと言っているくらいです。ですから、今日のお話も、「いのちの大切さ」について「死への準備教育」がすでに一つの回答を用意していて、それについてお話しするということではありません。ここ七年間奈良大学を中心に「死への準備教育」にかかわり、「生と死を考える会」の会員として、「いのちの大切さ」についてどう考えてきたかを、お話ししてみたいと思います。

「神戸連続児童殺傷事件」の時もそうですが、今年一月栃木県黒磯市での中学一年生（当時）による「女性教諭殺傷事件」、およびその後、バタフライ・ナイフによる殺傷事件が起きた学校では、校長先生は異口同音に、「いのちの大切さ（尊さ）」を話すあるいは「教える」と発言するのを聞きました。校長先生としては当然のことだったろうと思います。

昨秋、親しくしています新聞記者から、「神戸事件」に関連して、にわかに「心の教育」ということが言われ出したが、「死への準備教育」に何ができるのか、といった質問を受けました。私はずっと「いのちの大切さ」という言葉に引っかかっていました。「いのちの大切さ」で何だろう。いい答えが浮かんできません。そういう時、ちょっとずるいんですが、特権を生かしまして、学生たちに書かせてヒント

を得ようということで、「死への準備教育」の講義の中で、学生たちに「いのちはなぜ大切なのか」というアンケートをとりました。お渡ししたものがそうです。（1）幸い受講生の数も多く、色んな答えが出てきました。これらの答えで尽くされているといいのですが……どうでしょう。

普段われわれは、いのちが大切であるのは自明のことと認めています。ですからかえってあまり考えてこなかったのではないのでしょうか。校長先生はどう話しているのでしょうか。「いのちは大切なものだから大切にしましょう。」まさかそんなことは言っていないとは思いますが、……。『いのちの大切さ』、考えてみるとなかなか難しい問題です。学者の悪いくせですが、私も自分で十分考える前に、文献を探しました。

昨秋来、探した本の中で、私が最も印象に残ったのは、ちくま文庫に入っている高史明（コ・サミョン）氏の著書『いのちの優しさ』でした。お読みになった方はここにもおられると思います。本を読んで感動するという経験は年齢とともに減ってきましたが、これは久しぶりに感動できた本でした。まずこの本を手がかりに、「いのちの大切さ」について考えていきましょう。

一、自分のいのちは自分だけのものではないー高史明のいのち論ー

(1) へいのちとは何か

高史明氏は一九三二年、在日朝鮮人二世として山口県に生まれまし

た。氏は三歳で母を亡くしています。子供の頃の生活、文字通り極貧の生活でしたが、これも名著として知られています『生きることの意味』（ちくま文庫、一九七四年）に詳しく書かれています。その出版半年後、七五年に一人息子岡真史さん（当時中学一年生）を自殺で亡くしました。夫人と共に、真史君の書き残した詩を集めて、『ぼくは12歳』（ちくま文庫）を編みました。『いのちの優しさ』（ちくま文庫、一九八一年）など、〈へのち〉をテーマにした数多くの著作があります。現在は親鸞の研究者としても知られています。

では、『いのちの優しさ』を検討しましょう。この中のいくつかは、高校生を対象に行なわれた講演です。一見すると平易なのですが内容は非常に深いと思います。

「いのちへの目覚め」という講演を取り上げます。

いのちが大切であることは知っている。よくわかっているのだけれど、それをどう子供に教えていいのかわからない。たいていの大人はそう言うようです。いのちとは何か、それ以上は考えない。ですから、「いのちの大切さ」と言ってもはっきりしないわけです。国語辞典によりますと、いのちは、「人間や生物が生存するためのものと力となるもの」との説明があります。だいたいそれくらいの知識の人が多いでしょう。

少し長くなりますが引用しますと、「いのちとは、じつに深い重みをもっています。私たちが今日ここにあるのは、まず地球があればのことですが、この地球にいのちが生まれたのは、約三十億年前です。

それから長い時間をかけて、いのちがいのちを生み、さまざまな生きものとなり、その生きものと生きものがまた、助け合いの関係を結んで、今日のこの地球上の生きもの世界がある。そうしてみると、私たち一人ひとりの中にあるいのちというのは、三十億年という長い時間と、助け合いの関係を体現するものだ、と言ってもまちがいではないと思います。」(2) そう言っています。

まとめてみますと、私たちの〈へのち〉は「じつに深い重み」をもっている。その理由には二つあって、一つは「三十億年という長い時間」、もう一つが「助け合いの関係」で、その両者を体現しているからだということになります。

最初の方から見ていきましょう。私たちの〈へのち〉の中には、親の〈へのち〉が生きています。〈へのち〉の宿る場としての身体についてですが、私たち日本人には、わずか五十年ほど前まで「身体髪膚これを父母に受く、敢えて毀傷せざるは孝の始めなり」という言葉がありました。同様に、私たちの〈へのち〉の中には、その前のおじいさんおばあさんの〈へのち〉が生きています。先祖のいない人はいないわけですから、一人の人間には、先祖代々の〈へのち〉が「受け継がれ受け継がれて」、いま生きている人間の中に生きています。そのように遡ることができます。

〈へのち〉は、私の〈へのち〉である前に、「じつに重い内容をはらんで一人ひとりに託されたものと思います。」(3)と高氏は話しています。

〈私たちのいのちは自分だけのものではない〉ということですが。その理由として、まず、自分の〈いのち〉は、三十億年前に地球上に初めて誕生した生命が、長い長い間受け継がれて誕生したものである、ということが挙げられます。

兵庫県教育委員会が昨年九月にまとめました「心の教育の充実に向けて―心の教育緊急会議のまとめ―」(4)にも、「個としてのいのちが遠い祖先から連綿と受け継がれ、次代につながってゆく生命体として存在していることを学ぶなど、生命のもつ神秘や不思議さに目を向けさせることも大切である。」と指摘されておりますが、まさにその通りだと言えましょう。

(2) 〈いのち〉と〈知恵〉

では、その〈いのち〉がどうして、私たちには、自分のものと思われてしまうのでしょうか。この〈わたし〉とは何なのでしょう。

私たちは生まれて間もない頃は、誰も〈わたし〉とは言いません。

「おぎゃあ、おぎゃあ」と泣く赤ん坊です。赤ん坊は「みどりこ」と呼ばれます。〈いのち〉そのものです。成長してはじめて、〈ぼく〉とか〈わたし〉とか言うわけです。そして、それ以後は、人間は〈わたし〉という足を軸にして、世界を生きるようになります。他人を考える時には、〈わたし〉と〈きみ〉。〈いのち〉を考える時には、〈わたしのいのち〉、〈きみのいのち〉と言うようになります。

生まれたばかりの頃は、〈いのち〉があって、その上に泣き声があ

ります。ところが、一人立ちした人間には、〈わたし〉があって、そのあとに〈いのち〉が従属しています。ここには明らかに「逆転」があります。〈わたし〉は、〈いのち〉の後に、〈いのち〉から生まれるのです。にもかかわらず、〈わたしのいのち〉というふうに、まるで〈いのち〉を〈わたし〉の所有物であるかのように言うわけです。この「逆転」を正しく理解していないから、〈いのち〉が〈わたし〉だけのものになってしまうのではないか。そう高さんは考えたのです。

さて、〈わたし〉というものを成立させる土台には何があるのでしょうか。そこには「知恵」があります。さらに、その土台に「言葉」があります。

〈いのち〉を自分だけのもののように考えてしまうのは、私たちが言葉を覚え、知恵がついて、赤ちゃんの時には、全身で感じていた万物との共感を失い、〈いのち〉の本当の意味を見失ってしまうからではないか。高さんはそう考えました。知恵が〈いのち〉を見えなくさせているのです。

もう一つの「助け合いの関係」を見ましょう。

引用しますと、「私の中に流れている『わたし』の血は、それは私の血であると同時に、かつては別の生きものとしてあったものです。それが姿を変えたものが私の血です。私たちが毎日のようにいただいている食物を考えて下さい。人間は生かされ助けられているという土台があるからこそ、生きているのではないか。」(5) 高氏はそう言っ

ています。

人間は他の生き物を食べて生きています。人間は他の生き物に「生かされ助けられて」生きています。

繰り返しますと、「いのちの重み」、「いのちの大切さ」と呼ばれるものの根本は、自分の〈いのち〉の中に「何億年という流れを持ち、私たちが次から次の世代へと受け渡していくべき大きないのちが宿っている」こと、そして「人間は生かされ助けられて、生きています」と、この両者の中にあるということになります。

「いのちを託されている」と同時に「生かされている」。宗教家が、私たちは〈いのち〉を「預かっている」、「授かっている」あるいは「賜わっている」などと表現するのも、もとはと言えばこういうところに由来すると考えられます。

(3) 「わたしの立場」から「いのちの立場」へ

「わたしの立場」とは「知恵の立場」です。現代は〈知恵〉が偏重されている時代です。今日の物質文明をつくり出したのも〈知恵〉なら、環境破壊も〈知恵〉の仕業でしょう。この〈知恵〉は、他の生き物を殺し、食べていながら感謝することを知りません。私の中にある「もう一つの大きないのち」も、この〈知恵〉には見えないのです。だからこそ、現代の私たちには、「いのちの大切さ」の根本的な意味がわからないのだと言えます。そこにあるのは、反省を知らない〈知恵〉です。

高氏は言います。「まさにその『知恵』の向きを変えて、『わたし』をすべての中心にすることをやめる。そして酷い存在であるからこそ逆に、そのような存在である自分を深く反省して、他人の苦しみを共に呻き、他人の友となるとき、その人ははじめて人間の持つ優しさを光あるものとする事ができるのです。それは根本的にいって、人間のいのちの目覚めであると言えます。」(6)

「優しさ」は高氏のキー・ワードです。〈いのち〉の「優しさ」をもとにした人間関係を理想のものと考えておられるようです。〈いのち〉に目覚め、「いのちの立場」に立つ時、初めて〈いのち〉が見えてきます。そうすれば、赤ん坊の時、全身で感じていた万物との共感も取り戻すことができるでしょう。自分の〈いのち〉を維持するためとはいえ、日々その〈いのち〉を奪っている生き物への感謝の念も、連綿と連なって自分の〈いのち〉の中に存する「大きないのち」に対する畏敬の念も湧いてくる。高さんはそう言っているのだと思います。

二、「いのちの大切さ」をめぐって

(1) 奈良大学でのアンケート

今年三月十日に出された「文部大臣緊急アピール・子どもたちへ」の中で、大臣は「ナイフを学校に持ち込むな／命の重さを知ってほしい」と書いた後で、「命を奪われた人たちは、二度と帰ってはこない。／亡くなった人たちが傷ついた人たちのお父さん、お母さんや家族の悲しみがどんなに深いものなのか、それを知ってほしい。」と言いま

した。ですから、ここには「いのちの大切さ」として二つを挙げているわけです。

高木先生は昨年七月三日付け朝日新聞「児童殺害事件14歳の地図」の中で、「人の命は一回限りで、再生不能な存在であり、また『命を大事にする』ことは尊厳ある人権を守ることでもあるからです。」と、「いのちの大切さ」として二つを挙げました。それら実質的には三つの理由の内、二つまでは奈良大学の学生も挙げました。

アンケートの集計で迷いましたのは、自由記述でしたので、分類は私が出したのですが、分けた項目をどういう順序で並べるかということです。中でも「いのちの大切さ」と言う時、まず第一に言わなければならないことは何なのか。それはこの中に入っているのかということでした。数の多い順にまとめれば、お渡ししたようなものになります。が、それぞれの答えのレベルが違うのではないかと。たとえば、一番の「何事も生命あつての上のこと。『生命あつての物種』と、六番目の「人間にはそれぞれの役割(使命)があり、それを果たさねばならない。」とを比べてみますと、これらをとても同列におくことはできません。昨秋は私もよくわからないまま、学生たちにこのプリントを配りました。

「いのちの大切さ」に関して、何を言っても言わなければならぬことは、先ほど高氏から学んだ通りです。しかし、もう一つ心配がありました。いのちが大切である根本的な理由として、二つのことを挙げたとします。学生たちはそれを理解できるのかということです。これ

らの理由を、まさにそうであるがゆえにいのちは大切なんだと、受け入れるというか納得することができるかということです。高氏も、「わたしの立場」から「いのちの立場」への転換の必要性を述べました。この点をもう少し考えてみましょう。

(2) 〈いのち〉の三つのレベル

奈良女子大学名誉教授で現・奈良大学教授、教育哲学が専門の松井春満先生に「生きる力を培う教育」という兵庫県教育委員会のモットー(生きる力を育む教育)にも似たタイトルの著書があります。先生はそこで、「人間が生きるという場合には、生物学的な『生命』と社会的な『生活』、およびより高度に人格的な『いのち』の三次元の生が存在すると考えられる。人はこの三つの「次元の同心円の構造を生きる」(8)と書いています。この「生の三つの次元」という考え方が示唆を与えてくれるように思いました。

プリントに挙げました九項目は、生物学的な『生命』あるいは社会的な『生活』に関するものとして、強引にどちらかに入れることができます。両方に入るものもありそうです。しかし、そうしてしまわずと〈いのち〉に深みがありません。項目によっては「生命」あるいは「生活」の次元を超えたものがあるように思います。

もう三十年以上も前になると思います。〈子供を作る〉という言い方が登場してきました。初めて聞いた時は私もびっくりしました。それ以前は〈子は授かりもの〉という言い方が一般的でした。性がタブー

でなくなってきたこととも関係があるのでしようが、今では、子供は親たちが作るものという考え方がすっかり定着しました。おそらくその頃から、〈いのち〉がますます薄っぺらなものになってきたのではないかと思えます。先に挙げました「身体髪膚これを父母に受く……」と〈子供を作る〉という表現の落差はあまりにも大きいと思えます。

では、「人格的な『いのち』」とは何なんでしょう。人間が自然の因果を超越した世界に触れることができ、生きる意味を自覚するのにも関係する、そういう〈いのち〉の領域と考えられます。「使命」に生きるという生き方が生まれてくるのも、また、親、先師、神の慈しみ深い〈まなざし〉に生きる力を喚起され、それによって支えられた生き方が可能なものこの〈いのち〉の次元でしょう。説明するのは難しいのですが、感謝、慈悲、愛、優しさ、謙虚、感動、共感、畏敬……、そういう言葉が輝きを増すのもこの次元ですし、人権もここに属する概念と言え少しわかってもらえらるでしょうか。

先の高氏の知恵を超えた領域である〈いのちの立場〉もここに入ります。〈いのち〉に深み、奥行をもたらずのがこの次元であると思えます。そして、戦後、徹底して閑却されてきたのが〈いのち〉のこの次元、つまり「人格的な『いのち』」でしたでしょう。

(3) 〈人間を超えたもの〉への畏敬の念

高木先生の「宗教を教える必要はないとしても、『大いなるもの』、すなわち人間が理屈を超えて合掌する神や仏、あるいは大自然に対す

る敬虔な心を育てなければ、命の大事さも、死のことも理解できないと考えます。」(9)というご意見に私も賛成です。私たちは生命には「人格的な『いのち』」の次元があることに目覚めねばなりません。

先の兵庫県教育委員会がまとめましたものの中に、「心の教育」についての「有識者等の意見」が載っていましたが、私はイラストレーターの永田萌さんのものに一番共感を覚ええました。永田さんは、私と同じ年頃なんでしょうか、そこで、「私たちの時代は、自然に対する畏敬の念などの原始的な信仰心があったが、戦後の教育の中で、目に見えない大切なものがあることを教えなかった。広い意味での宗教観を切り捨ててしまった」(10)ことを指摘されました。何も学校だけの責任ではありません。社会全体が目に見えるもの、技術的なもの、計算可能なものを中心に動いてきました。戦後は、それと共に、徹底した世俗化が進行した時代でした。

宗教と聞いただけでアレルギーを示す人があります。その実、お墓参りもすれば、仏壇に手も合わせます。初詣にも行きます。クリスマスも祝うでしょう。宗教学者の山折哲雄さんはそういう人たちを揶揄して、「日本人は、宗教嫌いのお墓好き、信仰嫌いのお骨好き」と言いました。たとえ宗教嫌いであっても、宗教が基礎としたもの、私たちの人間の心の奥深くに根ざしているものを否定はできないでしょう。永田さんはそれを「原始的な信仰心」とか「広い意味での宗教観」と表現しました。ここにいう「目に見えない大切なもの」を〈人間を超えたもの〉(あるいは「大いなるもの」と考えてもさしつかえない

と思います。

三、「死への準備教育」に何ができるか

(1)「死への準備教育」と現代

大学での「死への準備教育」の場合、私は、学生たちが人生は有限であることをしっかりと自覚し、時間の貴重さを認識し、そのことによりこれまでとの価値観を改め、より真剣に人生に立ち向かわせることに重点をおいています。「死への準備教育」とは「よりよく生きるための教育」です。「生と死を考える教育」と「死への準備教育」の間には違いがないと考えてさしつかえありません。

人生が死によって限られている、との自覚は「言うは易く行うは難し」です。それゆえにこそ、デーケン先生は、学生たちに、自分がガンなどの不治の病におかされ、医師からあと半年の命と告げられた場合を想定し、「もしあと半年の命しかなかったら、残された時間をどのように過ごすか」という題で小論文を書かせることを勧めています。私もそれを実行しています。

私は、その他にガン「闘病記」を教材に使います。限られたいのち―実際には私たちもそうなんです―を生きている人たちに学ぶことは多いと思います。それに、学生たちの親はガン年齢ですから、ガンになった場合には、親が死について、死後について話しかければ、これに対応ができること、祖父母が死の床にいた時にも、アレルギーなく見舞えることをねらいとしています。

(2)アエラ・読売新聞・デーケンの提言(11)

子供たちに「生と死を考える教育」をどう行なうべきなのでしょう。しかし、どう行なうべきかと問う前に、まず先生方が「生と死を考える教育」の必要性を十分に認められることが大切だと思います。

〈生と死〉という観点からしますと、現代はいつたいどのような時代なのでしょう。

戦後、若い間に身近な人の死を経験することが少なくなりました。戦争がありません。若くして病気で死ぬ人は減りました。医療の発達のおかげで、たいいていの学生、生徒たちの両親、兄弟は健在でしょう。祖父母と同居する人は少なくなり、その祖父母もほとんどが病院で死ぬようになりました。〈死〉が日常生活から縁遠くなったのです。こういう事態は、大げさでなく、人類始まって以来のことと言えます。

ビートたけしは、一九九四年バイク事故で瀕死の重傷を負いました。約二カ月の治療の後、退院時の記者会見で、病院での生活ぶりを尋ねられた時、記者たちにこう答えています。

「結局、あの、運が良く生きて残ったんで、ずっと考えてたんだよ、いろんなこと。そうすると、まあみなさん同じだけどね、団塊の世代からあと、これからどうやって死んでいくかってあるでしょ？ で、急にそんなことが目の前にきた時に、オロオロするんですよ、どうせ。それがみなさんよりオレの方が早くきたんで、そのぶんだけずいぶんいい勉強になりましたよ。」

たけしの言葉をどこまで信用していいのか判断も難しいのですが、

そのすぐ後で、もう一度「一番肝心なのは死ぬことに對する哲学とかね、宗教的な意識がないとどんなに(か)最後のことでオロオロしますよ。」(12)と言っているところから見て、本心ではないかと思えます。死に直面して、「オロオロ」したというのは正直な気持ちだったでしょう。たけしは私よりも二歳上ですので、共に「団塊の世代」に属します。たけしも言う通り、私たちは死についての「哲学」も「宗教」も教えられてきませんでした。私たちの後の世代も同様でしょう。私たちは死の前で、ほとんど無防備な状態に置かれていたのではないのでしょうか。〈死生観〉に関しては、私たちは恐ろしく貧しい時代に生きていると思います。これはそのことへの、たけし流の警告だと考えます。

今世紀初めの次のリルケの言葉は、別世界のことのように聞こえてきますが、どうでしょう。

「昔は誰でも、果肉の中に核があるように、人間はみな死が自分の体の中に宿っているのを知っていた。(いや、ほのかに感じていただけかも知れぬ。)子供には小さな子供の死、大人には大きな大人の死。婦人たちはお腹の中にそれを持っていたし、男たちは隆起した胸の中にそれを入れていた。とにかく『死』をみんなが持っていたのだ。それが彼らに不思議な威厳と静かな誇りを与えていた。」(13)

教室で、人生で最も基礎的なこと、死を教えるなどということは、年配の方から見れば、異常なことかもしれません。曾野綾子は、一九八四〜八七年までの三年間、「臨時教育審議会」の委員を務めていた

時、「数回、デス・エデュケーションを義務教育の中で取り上げることを提案してみた。しかし当時の審議会では全く採用される気配はなかった」(14)と書いています。

デーケン先生は昨年度「日本死の臨床研究会」のシンポジウム「死への準備教育」の中で、次のような「よりよき明日の日本を築くための提言」(15)をなさいました。

今日の話との関連で注目されますのは、年一回「生と死を考える日」の開催と日本の実情に合わせた「死への準備教育」のための教科書の作成だろうと思います。新聞記者の方から、小・中・高等学校では、「生と死を考える教育」をどの時間にやるかが非常に大きな問題である、と聞きました。デーケン先生が控えめに年一回とおっしゃっているのはそういうことへの配慮からかもしれません。

いくつかの学校では年一回といわず、さまざまな試みが開始されているようです。昨年末、朝日新聞社の週刊誌「アエラ」十二月二十二日号で紹介されました。お渡ししました資料をご覧になって下さい。¹⁶ただ私立学校ばかりです。

この五月七日の読売新聞朝刊のコピーをご覧になって下さい。(17)ここ兵庫県の県立明石城西高校新聞部の試みが載っています。残念ながら、ゆっくり見ていくだけの時間的余裕がありません。各先生方でお読みいただきたいと思えます。いずれも貴重な資料だと思います。

(3)「生と死を考える教育」の今後

そのほかに、六月二日、NHKの午後九時半からの「クロースアップ現代」という番組で、「いのちを学ぶ・子供たちに『死』をどう教えますか」というタイトルでしたが、兵庫県の公立学校のさまざまな試みが紹介されました。わずか三十分の番組ですが、中身の濃い番組組でした。ご覧になった先生方も多いと思います。

小学校の西本先生は、道徳の時間、二年生の生徒たちに、子供がいたずらで投げたボールを吞み込んでしまい、えさを食べられなくなっただけで死んだ動物園のカバ「でめお君」を取り上げ、「失われたいのちは二度と戻らない」ことなどを教え、その感想を作文にまとめさせました。

中学校の広谷先生は、担任の生徒たちに、死を身近な問題として考えてもらおうと、父親を病気で亡くした時の自分の体験と、その時が初めてだったという、死について考えたことを話したようです。人間であるかぎり「死は避けて通れないんだ」ということを、これをきっかけに考えてほしいと話しました。

兵庫県ではないのですが、愛知県の高校の天野先生は道徳の時間に、「離婚と死別」という二つの別れについて話し、その感想を書かせました。

また、読売新聞にもありましたが、城西高校新聞部の試みが紹介されました。顧問の原先生は「リアルな現場を感じる事が勉強である」との大事な指摘を行いました。テレビでは、女子の新聞部員二人が、大学生の娘さんを交通事故で亡くされた、神戸大学の二木先生を訪ね、

「父親として娘の死をどう受けとめてきたか」という重いテーマで取材するところが放映されました。先生はこの死が自分にとってもつ意味を、「娘が死んだということ」を自分の心の中にかかえこみながら、自分がどう生きてゆくかということであると、時に涙ぐみながら話されました。「娘の死の悲しみの中で、いのちの重さにあらためて気づかされた。」「娘の死をきっかけに、自分の生き方を見つめ直した。」という先生の言葉に、二人の女子高校生は痛く感動した様子でした。彼女たちもこの取材を機に、きっと「自分の生き方を見つめ直す」と思います。

テレビカメラが回っているということを多少差し引かねばなりませんが、それでも先生方の話を聞く生徒たちの真剣な表情を見ていますと、兵庫県が他府県に先駆けて、いち早く「生と死を考える教育」をお始めになってよかったなと思います。

先生の側に、生徒たちにこういう教育が是非とも必要だという認識がありましたら、道徳の時間だけでなく、御担当の、たとえば国語の中でも、社会、理科、数学の中でも何らかの形で行なうことが考えられます。現在のところマニュアルのない領域です。これは必ずしも欠点とは言えないでしょう。

人生について、生と死について考えない人はいないわけですから、先生方お一人お一人が、自分は人生についてどう考えてきた、死についてはどう思うんだと、試行錯誤を繰り返す中から、よりよい「生と死を考える教育」が誕生していくように思います。

一月あまり前に、当研修所の垣尾先生から今回のお話をいただきました時、こういう重要な研修会に私のような者が出させていただいていいのかなと、正直躊躇いたしました。しかし、昨年の秋の高先生の著書との出会い、その感動の一端をお伝えできれば、私の役割も果たせるのではないかと。また、こういう席に招かれてお話しできる日が来ますことを、発足して今年で十六年目を迎えました「生と死を考える会」は切望してきただけではないかと、そう考えまして寄せていただくことにいたしました。お呼びいただきましたことを、一会員として大変名譽に思います。

これで私の話を終わらせていただきます。ご清聴どうもありがとうございます。ございました。

注

- (1) 後の「参考資料」参照
- (2) 高史明「いのちの優しさ」ちくま文庫、一九八七年、三一頁
- (3) 同、三一頁
- (4) 兵庫県教育委員会「心の教育の充実に向けてー心の教育緊急会議のまとめー」(平成九年十月六日発表)
- (5) 「いのちの優しさ」三六頁

(6) 同、三七～三八頁

(7) 後の「参考資料」参照

(8) 松井春満編「生きる力を培う教育」学術図書出版社、一九九二年、二六～二七頁

(9) 後の「参考資料」参照

(10) 「心の教育の充実に向けてー心の教育緊急会議のまとめー」

(11) デーケンの提言に関しては、後の「参考資料」参照

(12) ビートたけし「顔面麻痺」太田出版、一九九四年、二〇八頁

(13) 大山定一訳「マルテの手記」新潮文庫、一九六六年、十四～十五頁

五頁

(14) 曾野綾子「二十一世紀への手紙ー私の実感的教育論ー」集英社文庫、一九九五年、二八二頁

(15) 後の「参考資料」参照

(16) 省略

(17) 省略

参考資料

以下は、講義の際、参考資料(アンケート結果と参考文献とから成る)として配布したものである。これは前年の秋すでに奈良大学での講義の際、学生たちにも配布している。

「生命はなぜ大切か」アンケート結果

平成九年十月（奈良大学学生一四三名、自由記述、複数回答あり）

一、何事も生命あつての上のこと。「生命あつての物種」……四十六名

二、生命はかけがえのないものである。……三十三名

①生命は一度かぎりのものである。失えば二度と取り戻せない。

(二十一)

②自分の生命は一つしかない、他のどの生命とも異なる。(十)

③きわめて低い確率で自分は誕生してきた。(二)

三、生命は自分だけのものではない。……三十三名

①自分が生命を失えば他の人たちを悲しませる。私は人を愛し、ま

た人からも愛されている。(十五)

②生命は与えられたものである。親をはじめ、先祖の生命のつなが

りがあつて自分は生まれてきた。(十四)

③自分には人から必要とされている。(二)

④人間には生きる義務がある。(二)

四、限りがある（死がある）からこそ生命は大事。……十三名

五、人間は他の人とのつながり、助け合いの中で生きている。自分の生命も他の生命も共に大切である。……八名

六、人間にはそれぞれ役割（使命）があり、それを果たさねばならない。……七名

七、人間の前には未来が、さまざまな可能性が広がっている。……六名

八、死が恐ろしい。何としても生きたい。……五名

九、考えたことがない。……三名

参考文献

「では『なぜ（命は大事）』なのか。一言でいえば、人の命は一回限りで、再生不能な存在であり、また『命を大事にする』ことは尊厳ある人権を守ることでもあるからです。」

「本来、『生と死』を考えると、宗教的なものは切り離せません。しかし、公立の教育の場では宗教的なものを極力排除しています。宗教を教える必要はないとしても、『大いなるもの』、すなわち人間が理屈を超えて合掌する神や仏、あるいは大自然に対する敬虔な心を育てなければ、命の大事さも、死のことも理解できないと考えます。」

「こうした体験（喪失体験）」を、親も意識的に受け止め、「何で喪失は悲しいのか」を子どもと共に考える姿勢が大事でしょう。そこから「生と死」「大いなるもの」へと思いが至れば、「命は大事」という言葉に「いのち」が吹き込まれるのではないのでしょうか。」

「兵庫・生と死を考える会」会長高木慶子「児童殺害事件十四歳の地図」七月三日朝日新聞

シンポジウム「死への準備教育」ーよりよく生きるためにー

「よりよき明日の日本を築くための提言」(アルフォンス・デーケン)

(1) 学校教育の中で

- (a) 現状では、中・高校で少なくとも年一回「生と死を考える日」の開催が望ましい。この日は①死への準備教育、②悲嘆教育、③自殺予防教育、④交通事故防止教育、⑤エイズ教育の五項目のテーマについて、関係者の講話や教師・父母も参加するディスカッションなどを行なう。

(b) 社会問題的な事件（神戸の小学生殺人事件や阪神大震災・地下鉄サリン事件など）の後遺症に備える危機対応チームの結成。

(c) 各国の「死への準備教育」の教科書を参考にして、日本の実情に合わせた「死への準備教育」のための教科書の作成。

(2) 病院で患者の家族及び遺族のための悲嘆教育の実施。

(3) 一般社会の中で

(a) 生涯教育として、各年代に応じた「死への準備教育」「悲嘆

教育」の普及促進。

(b) ホスピス・ボランティアなどを希望するボランティアの養成と訓練の必要性、などがあげられよう。

平成九年度「第二十一回日本死の臨床研究会プログラム・予稿集」

高史明(コ・サミョン)「いのちの優しさ」ちくま文庫

〔付記〕本研究は、奈良大学総合研究所より平成九年度研究助成を受けて行なったものの一部である。助成いただきましたこと、ここにあらためて御礼申し上げます。

Sur l'importance de la vie.

Isao Omachi